

## ＜結果の概要＞

### 1 出生

(1) 出生数は、10,424人で前年より467人減少し、過去最低となった。出生率（人口千対）も過去最低の8.6であった。

出生数は昭和49年以降減少傾向にあるが、平成3年以降は、増加と減少を繰り返しながら、全体としてその傾向は緩やかになっている。

(2) 出生数を母の年齢（5歳階級）別にみると、前年に比べ、20歳代後半で382人の減少となっているほか、20歳代前半、30歳代後半でも減少している。

**母の年齢階級別出生数**

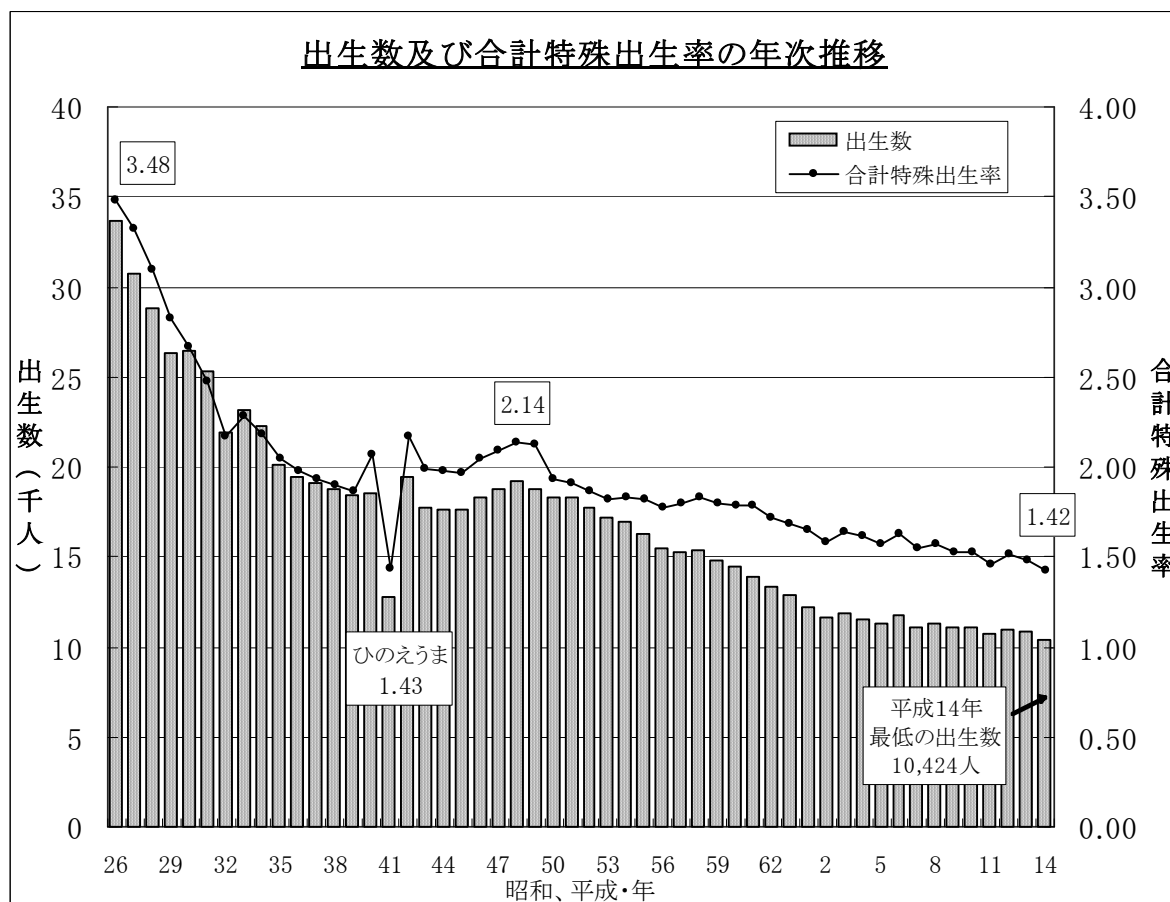
年齢階級 (歳)	出生数(人)	
	14年	13年
15～19	177	182
20～24	1,602	1,652
25～29	3,920	4,302
30～34	3,478	3,463
35～39	1,109	1,153
40～44	138	133
45～49	0	6
計	10,424	10,891

### 2 合計特殊出生率

合計特殊出生率は、1.42で、前年の1.48を下回り、過去最低となった。

その年次推移をみると、昭和50年以降低下傾向にある。

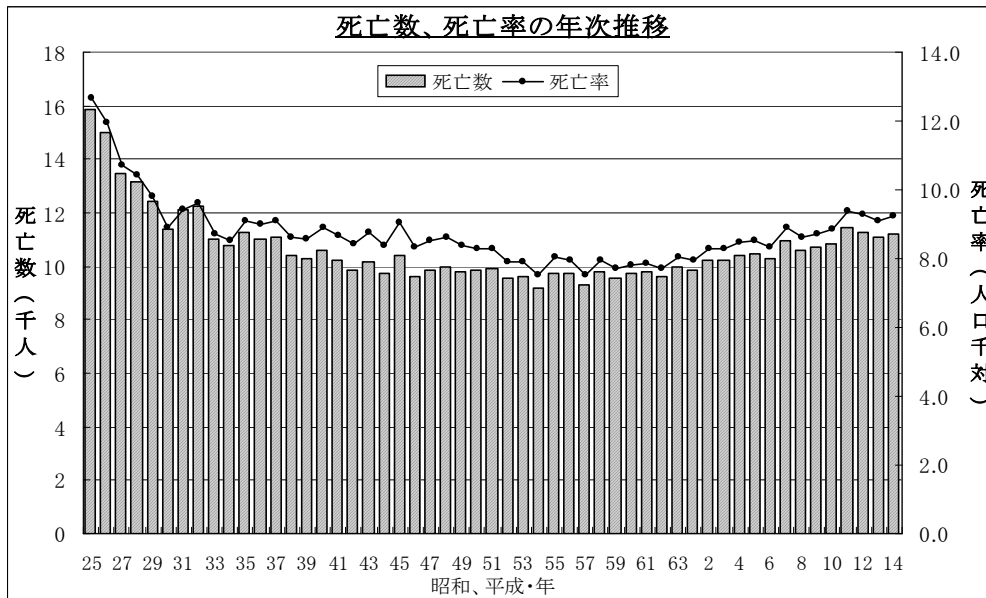
なお、全国の合計特殊出生率も過去最低の1.32となった。



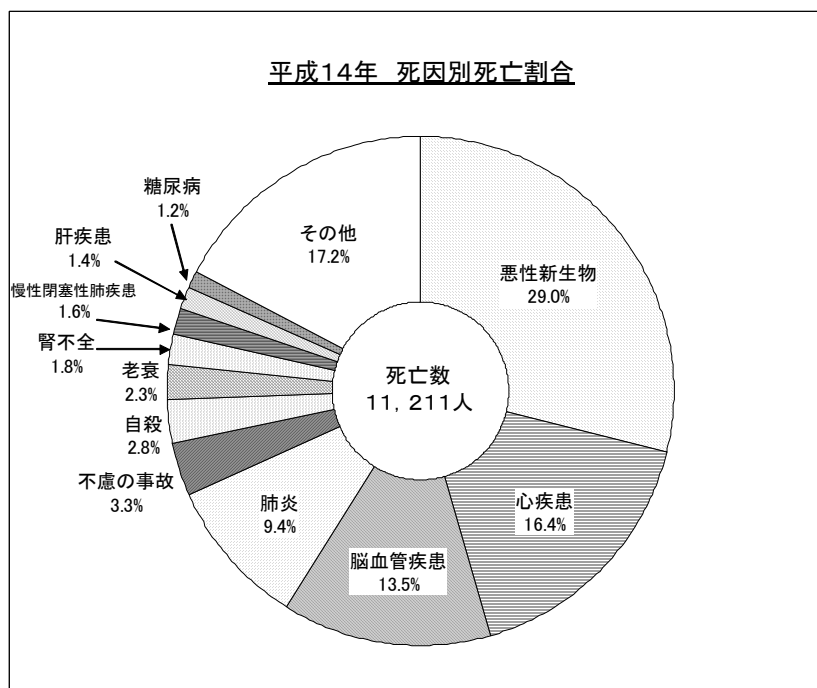
### 3 死 亡

(1) 死亡数は、11,211人で前年より1,577人増加した。

死亡率（人口千対）は、9.2で、前年を上回り、その年次推移を見ると、昭和50年代後半以降、上昇傾向にある。



(2) 死因順位についてみると、第1位は悪性新生物（29.0%）、第2位は心疾患（16.4%）、第3位は脳血管疾患（13.5%）で、この三大死因が死亡数の約6割（58.9%）を占めている。



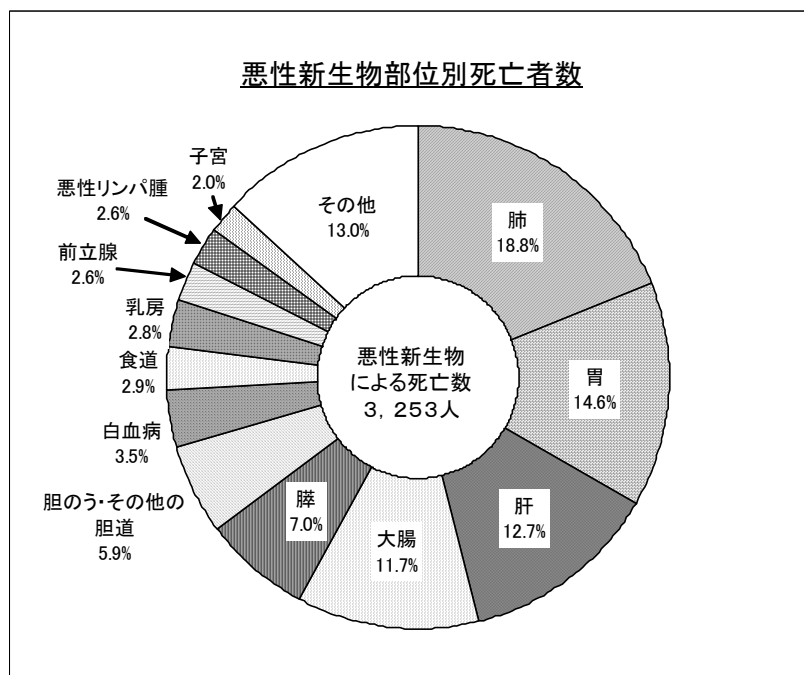
また、死因別死亡数を前年と比較すると、減少したのは、脳血管疾患（86人減）、不慮の事故（62人減）、肝疾患（43人減）などであり、増加したのは、心疾患（104人増）、肺炎（102人増）などである。

主な死因別死亡数・死亡率

死 因	平成 14 年				平成 13 年			対前年比	
	順位	死亡数	死亡率	割合	順位	死亡数	死亡率	死亡数	死亡率
全 死 因		11,211	923.5	100.0		11,054	909.8	157	13.7
悪性新生物	1	3,253	268.0	29.0	1	3,177	261.5	76	6.5
心 疾 患	2	1,839	151.5	16.4	2	1,735	142.8	104	8.7
脳血管疾患	3	1,515	124.8	13.5	3	1,601	131.8	△ 86	△ 7.0
肺 炎	4	1,052	86.7	9.4	4	950	78.2	102	8.5
不慮の事故	5	374	30.8	3.3	5	436	35.9	△ 62	△ 5.1
自 殺	6	316	26.0	2.8	6	265	21.8	51	4.2
老 衰	7	255	21.0	2.3	7	258	21.2	△ 3	△ 0.2
腎 不 全	8	202	16.6	1.8	8	210	17.3	△ 8	△ 0.6
慢性閉塞性肺疾患	9	183	15.1	1.6	10	175	14.4	8	0.7
肝 疾 患	10	152	12.5	1.4	9	195	16.0	△ 43	△ 3.5
糖 尿 病	11	137	11.3	1.2	11	120	9.9	17	1.4

注) 死亡率は人口10万対。

なお、悪性新生物の部位別の死亡順位をみると、肺がん（18.8%）を筆頭に、胃がん（14.6%）、肝がん（12.7%）、大腸がん（11.7%）と続き、この4つで悪性新生物全体の約6割（57.8%）を占めている。



#### 4 自然増加

出生数から死亡数を差し引いた自然増加数は、マイナス787人で、平成11年以降、死亡数が出生数を上回る自然減の状態となっている。

自然増加率（人口千対）は、マイナス0.6で前年のマイナス0.1に比べ、減少した。



## 5 乳児死亡

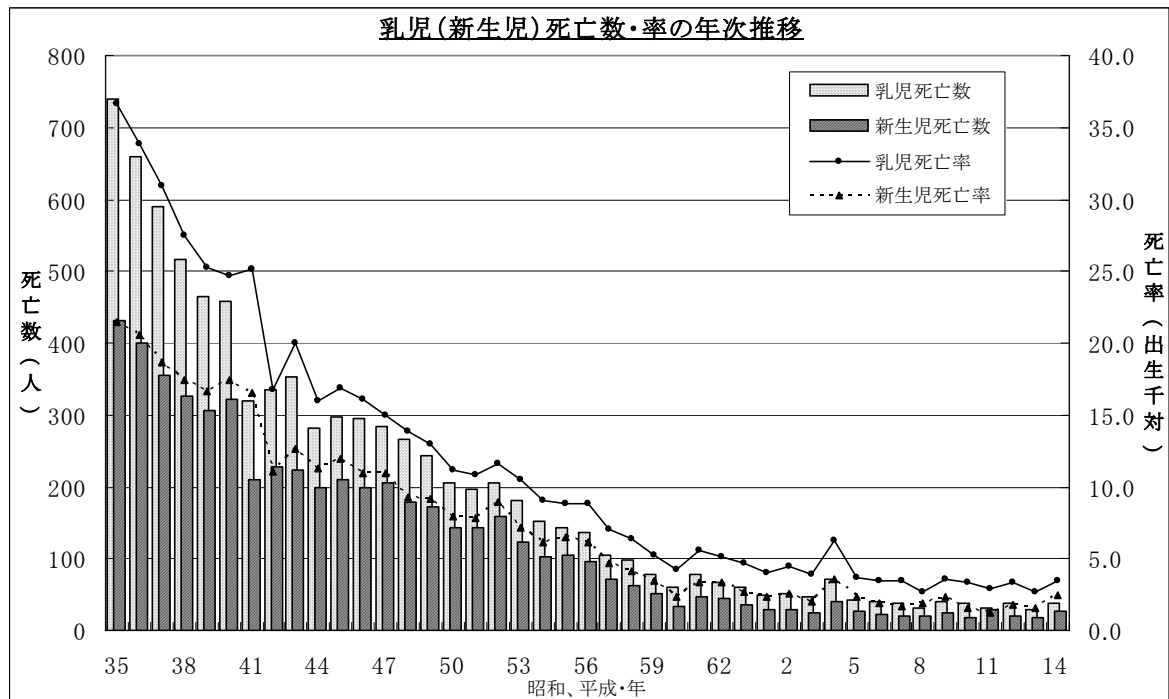
生後1年未満の死亡である乳児死亡数は、37人で前年より8人増加した。

乳児死亡率（出生千対）は、3.5で前年の2.7を上回った。その年次推移をみると、昭和60年までは急激に低下し、その後は、上昇と低下を繰り返しながらほぼ横ばいに推移している。

## 6 新生児死亡

生後4週未満の死亡である新生児死亡数は、26人で前年より9人増加した。

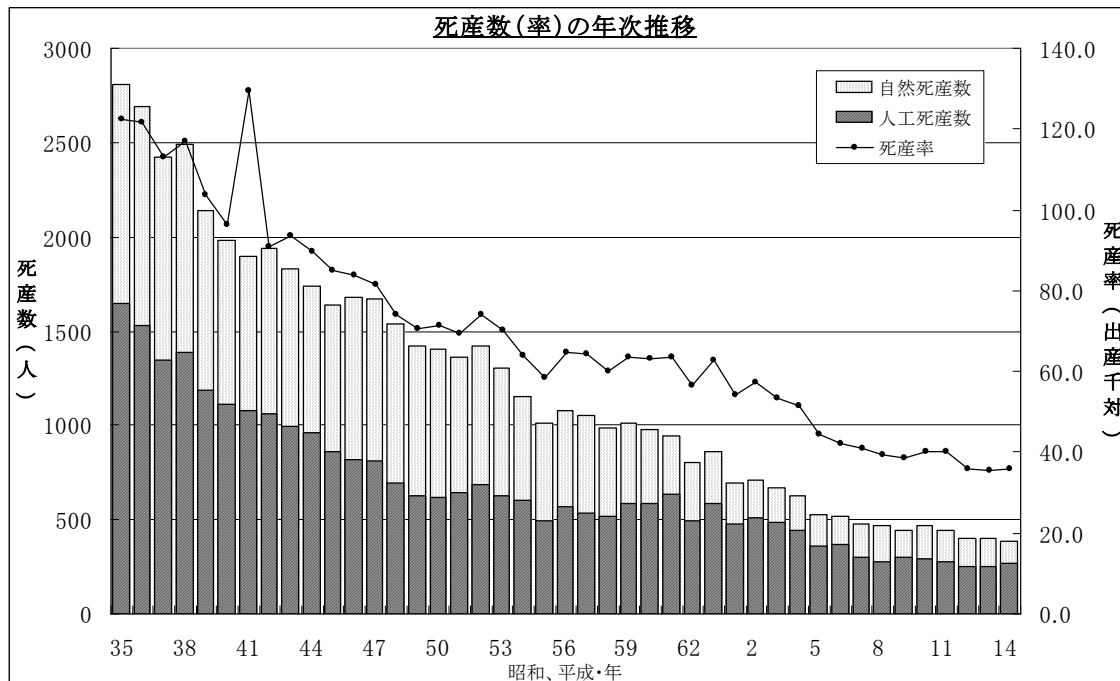
新生児死亡率（出生千対）は、2.5で前年の1.6を上回った。その年次推移をみると、乳児死亡と同様にここ数年は、ほぼ横ばいに推移している。



## 7 死産

死産数は、388胎で前年より13胎減少し、その内訳は、自然死産数が118胎、人工死産数が270胎となっている。

死産率（出産千対）は、35.9で前年の35.5を上回ったが、その年次推移を見ると、ここ数年は緩やかな低下傾向となっている。



## 8 周産期死亡

妊娠満22週以後の死産に、生後1週未満の早期新生児死亡を加えた周産期死亡数は、62で前年より6上回った。

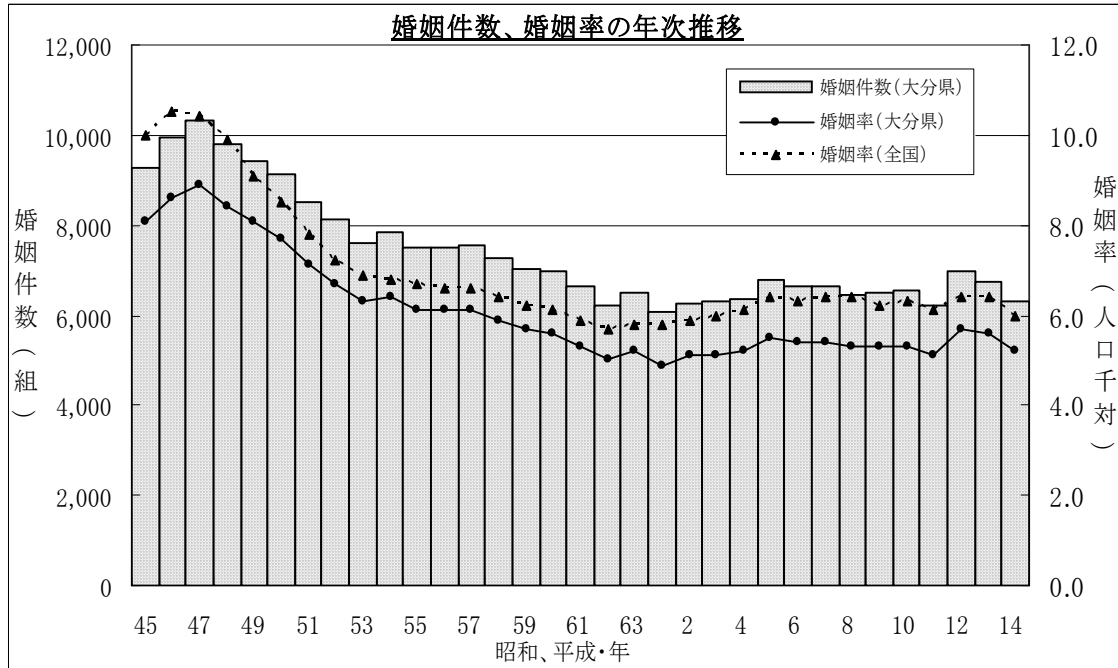
その内訳は、妊娠満22週以後の死産が39胎、早期新生児死亡が23人となっている。

周産期死亡率（出産千対）は、5.9で前年の5.1を上回った。

## 9 婚 姻

婚姻件数は、6,306組で前年より441組減少した。

婚姻率（人口千対）は5.2で前年の5.6を下回り、その年次推移をみると、昭和48年以降低下を続けた後、平成2年以降は増加傾向となり、平成5年以降は、ほぼ横ばいに推移している。



なお、平均初婚年齢は、夫28.4歳、妻27.1歳であった。

夫については、平成に入って以降、ほぼ横ばい傾向にあったが、平成13年に上昇している。妻については緩やかな上昇が続いている。

### 平均初婚年齢の年次推移

	夫		妻	
	大分県	全 国	大分県	全 国
平成3	28.2	28.4	26.0	25.9
4	28.2	28.4	26.0	26.0
5	28.2	28.4	26.1	26.1
6	28.2	28.5	26.1	26.2
7	28.2	28.5	26.2	26.3
8	28.2	28.5	26.3	26.4
9	28.1	28.5	26.3	26.6
10	28.1	28.6	26.5	26.7
11	28.0	28.7	26.6	26.8
12	28.1	28.8	26.7	27.0
13	28.4	29.0	26.9	27.2
14	28.4	29.1	27.1	27.4

## 10 離 婚

離婚件数は、2,682組で前年より76組増加し、過去最高となった。

離婚率（人口千対）は、2.21で前年の2.14を上回り、過去最高を更新した。その年次推移は平成3年以降、上昇傾向にある。

なお、全国の離婚件数（28万9836組）、離婚率（2.30）も、過去最高を更新している。

